

## 「美人画の雪月花 -四季とくらし 培広庵コレクションを中心に」展 作品解説

徳島県立近代美術館

### ■四季【冬】

#### 53 千種掃雲(ちぐさ そううん) 「雪の日」

1912(明治45)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

雪の中、「御料理 付(つ)た屋」から、傘をさして出てきた女性。慎ましい身なりをして、手には荷物を持っているので、客に何かを届けに行く仲居でしょうか。掃雲(そううん)は日本画の主題として労働者をいち早く取り上げた画家です。この作品でも、画家は女性の華やかな美しさではなく、雨の日も雪の日も淡々と過ぎていく彼女の静かな日々を表現しています。(H.M)

#### 54 伊藤小坡(いとう しょうは) 「雪の朝」

1930(昭和5)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

雪の庭で、南天の赤い実を眺める若い女性を表しています。立っているのは、庭に置かれた飛び石なのでしょう。寒さのため、振袖の袂(たもと)に手を入れています。雪はふんわりと柔らかく、南天や寒菊のうえに積もっています。南天は冬の季語、お正月飾りにも用いられます。それに対して、女性が着ているのは、梅の花が表された振り袖。着物は季節を先取りして選びますので、雪と梅の取り合わせは、春に向かう季節感を感じさせてくれます。(Y.M)

#### 55 島成園(しま せいえん) 「雪」

1925(大正14)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

雪が降り積もっていることに気付いた女性が、外に飛び出してひとかたまり持ち出そうとしています。凍えた指を温めようと屈んで小さくなる姿や、ちらりと見える華奢な首や腕がいかにも寒そうに、また愛らしく見えます。積もる雪に驚きや感動を覚えるのは、いつの時代になっても変わらないのかもしれませんが。(H.M)

#### 56 森川青坡(もりかわ せいは) 「雪中二美人の図」

昭和初期 絹本着色 培広庵コレクション

雪のなか、爪皮(つまかわ)をつけた歯の細い利休下駄(りきゅうげた)を履き、二人の女性が道を急いでいます。鶴模様の帯を締めた手前の女性は、襟巻きをして寒そうです。奥の女性は、黒衿(えり)をつけ、藍の前垂(まえだ)れをしています。彼女は傘を二本持って、閉じた傘には雪がついています。雪が降り

はじめたので、置屋から傘をもって芸妓(げいぎ)に届けにきた見習いの少女なのかもしれません。画家が生きた昭和初期の京都の一こまなのでしょうか。(Y.M)

57 木谷千種(きたに ちぐさ) 「傘の雪・吉野山」

大正初期 絹本着色 屏風(二曲一隻) 培広庵コレクション

上方で流行した地唄舞(じうたまい)の出し物が表されています。「傘の雪」は、若い頃に男に捨てられた芸妓だった過去をもつ尼が「花も雪も払えば清き袂(たもと)かな」と歌うもので、ここでは降る雪と着物の桜柄で象徴されます。「吉野山」は、手にした鼓と源氏車の帯、吉野の山桜を描く屏風で表現されています。演奏の前に鼓の紐(ひも)を調節している姿からは、これから彼女が打とうとする音が想像できます。(H.M)

58 鏑木清方(かぶらき きよかた) 「初雪」

1912(明治 45)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

若い娘が外にちらつく雪に気付き、障子を開けた瞬間を描いたもの。部屋の中では、障子越しの雪の影を見たのでしょうか、それとも障子を叩く雪の音を聞いたのでしょうか、娘の静かな暮らしが想像されます。窓の外に置いた鉢植えの橙(だいだい)の実も色を濃くしており、冬がだんだんと深まっていることを示しています。(H.M)

59 伊東深水 (いとう しんすい) 「積雪」

1940(昭和 15)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

女性が障子をそっと開けると、ほころびはじめた紅梅の枝に新雪が積もっていたようです。視線の先には銀世界が広がっているのでしょうか。粉雪がまだ舞っています。深水は、自身の屋敷にさまざまな種類の梅を植えていたといいますので、そのような日常とつながった情景なのかもしれません。女性は、矢羽根(やばね)文様の着物に椿柄の帯を締め、羽織を羽織ったさりげない装いですが、そこには色気がにじんでいます。(Y.M)

60 山川秀峰(やまかわ しゅうほう) 「雪」

1940(昭和 15)年頃 絹本着色 村島外三雄氏蔵

障子を開けて雪を見つめる和服姿の女性を表しています。柔らかい粉雪も障子に当たるとさらさらと小さく音がするなど気配がありますので、降りはじめに気づいたのでしょうか。師の鏑木清方(かぶらき きよかた)が取り組んだ題材ですので、それに刺激された作品といえます。本展には、同門である伊東深水の〈積雪〉(no.59)も展示していますので、比較して見るのも興味深いはずです。秀峰は、女性の顔をよりクローズアップして表しています。(Y.M)

61 竹久夢二 (たけひさ ゆめじ) 「投扇興(とうせんきょう)」

1917(大正6)年頃 紙本着色 培広庵コレクション

投扇興(とうせんきょう)は、江戸時代後半に流行った遊びです。桐の箱(枕)に立てた的(胡蝶(こちょう))に、少し離れたところから開いた扇子を投げ、的の落ち方や扇子の形などで点数を競います。この絵の枕に描かれているのは、桜でしょうか。右側の蜻蛉(とんぼ)文様の着物を着た女性は、両膝をついた姿勢で的をねらっています。左の女性は、膝に得点表を広げ、横座りで相手のようすを見ているようです。二人のいくらかしどけないようすに、ほのかな色気が感じられます。(Y.M)

62 梶原緋佐子(かじわら ひさこ) 「投扇(なげおうぎ)」

大正後期 絹本着色 徳島県立近代美術館蔵

左右の屏風にひとりずつ描かれ、向かい合っている舞妓二人は、投扇興(とうせんきょう)という遊びをしています。下くちびるにだけ紅をさしているのは、舞妓になったばかりの証拠です。無邪気に遊ぶあどけない姿を描くことで、華やかな存在としてではなく、生身の少女としての舞妓をとらえようとしたのかもしれない。(H.M)

63 大林千鳥樹(おおばやし ちまき) 「新粧(しんそう)」

1920(大正9)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

本展には、大林千鳥樹の作品として昭和初期の〈絵本見る女〉(no.41)を展示しています。日常の一コマともいえる女性の横顔を淡い濃淡によって表した作品です。それに対して、この作品では妖艶な雰囲気があります。できたばかりの化粧のようすを鏡で確認しているのですが、着物は黒地に不思議な花のような文様。衿(えり)元や袖口からは、長襦袢の真っ赤な色が覗いています。敷物が絨毯(じゅうたん)であるのもエキゾチックです。(Y.M)

64 菊池契月(きくち けいげつ) 「羽子」

1935(昭和10)年 絹本着色 培広庵コレクション

すっきりとした中性的な面立ちに細身の体軀は、浮世絵の大家である鈴木春信(すずき はるのぶ)の画風を思わせます。契月(けいげつ)は過去の作品から多くを学んでいたのです。また春信は、浮世絵に多色刷りと呼ばれる色鮮やかな表現を持ち込んだ絵師として知られます。梅の文様をあしらった鮮やかな着物も、契月が春信に倣(なら)って描いたのかもしれない。(H.M)

65 菊池契月(きくち けいげつ) 「元禄美人」

大正末期 絹本着色 培広庵コレクション

宝珠や打ち出の小槌(こづち)、竹や松を配した宝尽くしの文様の小袖に、菊の文様をあしらった鮮やかな打ち掛けは、文化が爛熟(らんじゅく)した元禄期の豪華な好みを映し出しています。一方で、ほのぼのとぼかした黒髪や眼差しの表現には、気品ある女性像を得意とした契月らしさがあらわれ、彼女の物静かな表情に私たちは引き込まれます。(H.M)

66 谷角日沙春(たにかど ひさはる)「伊勢詣」

昭和初期 絹本着色 培広庵コレクション

女性は落ち着いた色柄の打掛に、鳶(つた)の文様をあしらった帯を締め、高価でありながら控えめなデザインのべっ甲の櫛と簪(かんざし)で、伊勢に詣でるのにふさわしい装いをしています。背景には、伊勢神宮の内宮につづく宇治橋と思われる情景が水墨で描かれ、厳かな雰囲気強調されます。(H.M)

■四季

67 堂本印象(どうもと いんしょう)「研遊帖(けんゆうちょう)」

大正後期 培広庵コレクション

睦月(1月)から師走(12月)まで、一月に一枚ずつそれぞれ女性の風俗を表した12点一組の作品です。平安時代からはじまり、江戸時代文政期に至る風俗の移り変わりが、季節の変化とともに楽しめるようになっています。本展では、江戸時代や桃山時代に取材した作品も多く展示していますので、どの時期の衣装や髪型なのか、ここで振り返ってみるのもいいかもしれません。なお、各月の風俗は旧暦にもとづいて表されています。(Y.M)

解説 森 芳功(Y.M)<徳島県立近代美術館・学芸員>

宮崎 晴子(H.M)<徳島県立近代美術館・学芸員>